常山紀談

函番號 ヒ1 號
種別 國
購番號別 32,6 號
月日入 月 日

919.5
338
Vol. 2

滋賀県教育委員会
學校藏書印

常山紀談巻之二目次

一 東照宮大高城へ兵粮を入れ給ふ事
一 大久保忠俊の事
一 猛そ合戦今河義元討死の事
一 信長上京の事
一 東照宮大高城を引取給ふ事
一 武田信玄忍びの者を討たる事
一 信玄鹿島信右衛門を呼まつる事
一 備前國竜口落城の事 附 浮田直家の事 并 岡剛助高名
一 遠藤喜三郎三村家親を打事 并 備前明禅寺合戦の事
一 上杉謙信小田原へ攻入まつる事 附 上京の事

一 新發田治長ゞ事
一 信濃國川中島合戰の事
一 謙信軍中ゟ青竹を持まゝ事
一 謙信松山城後巻の事
一 東照宮一向宗ゟ黨と厚木坂ゟて御軍あゝ事 附 蛭谷半之丞
ゞ事
一 同釘崎合戰の事
一 向井與左衛門かゝり感狀の事

第山紀談巻之二目録

第山紀談巻之二

備前國 湯浅新兵衛元禎輯録

○今河義元尾張國大高の城ゟ移殿三郎長持を遣ゝ
織田信長も所ゝゟ城をゝく丹家ゟハ水野帶刀善照寺ゟハ
佐久間右京中將ゟハ梶川
鷲津ゟハ飯尾近江守宗宣
又丸根ゟハ佐久間大学助盛重をおゝて其外寺ゟ社寺毋廣
瀬ゟも塔あり大ゝゟ兵粮を入ゝバ鷲津丸根ゟ貝を吹べし
寺部峯毋廣瀬の塔ゟゟ弛集り丹家中為ゟ後詰
ゝそ宮ゟゟ義元 東照宮の御ゟゟ使をゝて大
高ゟ兵粮を運入ゝせゟゟ 東照宮ゟ將ゟ仰
てやゝて扨きゝゟゟを酒井石川等信長のゟあてゝ

くれ中に大高に兵粮入んとせしをせめ入らまゝにられて謀をなして先兵をわかち福釜い松平左馬助親俊酒井與四郎忠親石川與八七郎等四人永禄二年四月九日に駿府大高鷲津丸根を取かこみ寺部の砦へおしよせとかゝり兵をひきゐる兵粮米馬に少しつゝ也大高城二十町ばかりとをきひくまひくり先陣寺部に入よせ城中さゝぐれを一の木戸口打破て火をかけて又梅坪に入せ三の丸まで攻入火を放て焼ゝる其煙天をてゝ開けあつひきとゝろく也もれば丸根鷲津より見て三河の敵ぞるぞとふと越て攻ゝる八ゝ故ゝと覚ゆるぞとく後詰

せよとて寺部梅坪に入かけ向ふ其間に東照宮鷲ととゝせ半とゝひ采おいをゝる馬千二百匹打ゝとゝく事なく大高小選入させひかり丸根鷲津に残る者どもを見れども大ゝ後者に出ゝるバせんゝ出ゝ七ゝ人々今夜の謀畧及ぶ拡ひきかゝひ岡崎に召まし此甚ゝ易さゝだてかりきゝ飛ばゝ中れバ関に召まし此甚ゝ易さゝだてかり先見ひもよゝ寺部梅坪を攻て火をかけ丸根鷲津の軍兵を後づゝ出せひきゝ者ゝて兵粮をとゝび入る兵法に神速を貴といひ又其不意に出るとゝ

ことにつゝとのゝ戸ひゝれバ皆世殿信濃寺に雪齋が兵書をゝみ習ひまひしゝかゝ某ハよも出ゝ一生出ゝれ

て六寸のさを得半ばくるとそでやくる此十八は伊賀のぶ
なり

○大久保孫五郎ハ越前の人なりしが武者狂行しく三河来
て吾姓をもづるべきハ宇津新八郎なりとて大久保は姓ゆ
ゆづりしが其ものふ功名をんとて安祥の城攻ふ先ヶ附
しく終ふ討死をなり新八郎忠俊後ハ五郎左衛門と云今
川義元討まくく　東照宮大言をひらせるハ夜半ふ
大雨ふく士卒こぶるまゝ忠俊御側ふ隙をひ奉り
度〻乗返し詞をかけ人ふをもめくり退くるなり

○永禄三年五月今川義元大軍をひさゐ織田信長をう
つ　東照宮此時陣せさ勢ゐひ丸根の砦を攻おとしを

今川家の軍兵も警固を攻落し義元桶はさまに着陣せし
る信長ハ素より鳴海ふ打て出防戦せんとの志なり　老臣ども
大敵なるまゝハ清洲をとりまくを海れども中入ぶ通寝して
猿楽ハ羅生門の曲舞をまゝをれ〻時欲既ハ攻来ると
告来ふ信長少もさわがずハ人間五十年下天内と謡まこぶ
夢幻のめしといふ處をおもしろくひくく忽螺ふ吹
ゐてをせ物の具して主従僅ふ八騎歩卒二百人ばかりふ
け出て熱田のうふ詣で願文を神殿ハ納らゝ中ハ軍兵
進づゝ来りまり源太夫の相より東をくまゝハ鳴津丸根
攻おとされしりと云て思烟さちのぼる海ふハ漂ふまゝハ
ふ東のさを一文字ふもゝむで砦ふの味方ふ使をせ

ひさ具し中洛の砦ふもとに陣ハ今川の大軍迫来
道へくり出し旗本小勢なれん所へ山陰より切てかゝりの猛夜
を決すべきと大音声にて下知せられしハ士卒皆きそひさ
みてり旗をたゞせ山うげより桶はざまに向ふ義元ハ駿州
の先陣お勝ゝと悦び酒りしてふ打しも天俄
くもり夕ぐれうつれと心ハ風雨をみ〻しうきまハ信長乃
兵かゝり来る拠きも寄ぶ不意に戦ふあらてゝ斗な
きハ水野大郎左清久一騎小首をとゝ義元ハ紺代の輿を住
長ゝて敵ハ旗本疑ひりとて退ゝて戦まゝハ義元も
返し合せて戦まゝを服部小平太後つけ毛利新助を首と
なりゝ左文字の太刀松倉郷の刀を分捕とすといへり、

○信長桶はさまにて義元を討とりて後潜小士七八人召具し京ふ
上ゝ帝都の事ども窺ひ見それより三好が高屋の城ふ往て長
慶ふ会ゝまゝるハ信長ハ張少て領い地をゝ〻せんべし地ふ
ゝるゝど畿内にて学ぶ〻ハ三好家の先陣〻べし
いまゝハ三好学ぶ〻べきと松永淳正法〻其事止ふ氏
時齊蔡義龍信長を殺さんと乃ふ士十二人堺の津ふ出〻
代長写て堺ゝ到り義龍ハ士乃旅宿ゝ乃伝義龍ハ討
ゝ〻ゝ奴ふ〻ゝ汝等一〻首を刎ゝて刀の柄ゝ手
かけ〻ゝふ〻れる勢ゝ乃ふ恐まあハて平伏し〻ゝまハ後世
蔑ゝ罵て帰られゝ

○丙子の時　東照宮ハ大高の城ゝおりゝせ〻らハ苅屋水

堅吉信元浅井六郎助道忠をもて桶はざまに義元を討
命をおくされいぬ今川家の城々ども皆あけ退ひとく居城
へ帰せ〳〵まき拙るべうんと告申されしバさや所はあれ所
人〳〵申る拙せ〳〵石下郎ハ母の兄弟なるハ誰もさうなる
ゝれども今ハ敵とまうまき中なれ〳〵やわまをたゞらん
この謀かる拙ゝで此城を退るバ延奉るといまゝ手
弓矢ゆる対の恥辱後世までとゝひゝまるべ浅井を
ゆゝ玉て味方れ告をもちく怪こて参にへハ帰らゝと仰お
まて〳〵までハ二の丸小ゝ〳〵せゝ丸ゝ入〳〵せゝひて持口を洗く
もうまゝ〳〵ゝ夜ゝ入て岡崎より弓井伊賀守忠吉義元の変
を聞きゝ今川あれ人〳〵も後州へ引とる名を学〳〵此上を

兵をかつ〳〵ゝ拙れども夜間くて乱〳〵ゝとて月の出を待て
城を打出さゝ引ゝ浅井を郷導ゝ用らゝ池鯉鮒の駅ふつゝ
ゝへバ苅屋ゝも討〳〵おゝ所を一揆起ゝゝ浅井馬を乗ゝ
せ水野下野ゝ使者浅井六郎案内ゝ〳〵ゝ大音ゝ呼ゝ
ゝまゝ皆道をひゝまて急なゝ来ゝ大樹寺まで引取せ
ゝひゝ後殿ハ大久保五郎右衛門忠俊ゝ翌日岡崎ゝ帰入せ
ゝゝひゝ浅井を〳〵池鯉鮒ゝ〳〵ゝ〳〵せゝひ後の詰ゝ
ゝ御座子をゝて賜ゝ〳〵ゝ扇のゝ六本ゝ〳〵ゝ永
ゝ浅井が家れ故とゝゝとゝゝゝ　東照宮の信義尊
ゝ浅井ゝ人〳〵ゝ〳〵後ひゝゝ

○甲州二のゝれびゝ若数十人信玄ゝ叛ゝ半方て山小屋ゝ

ゆゑ信玄謀りて さやすく討とりたやと之ひ計り居るゝ内に
此者ゝ城中ゝ忍び入るゝ いかゝあるゞ入がゝたやと問ゝふ内のやう
きびしく おもてうれ あるもゞく其仕あ〳〵ハ形ゝハ松とうもう
料ゝとゆくいとゝ信玄いゝ山小屋ゝ忍び入らんハいかゞと問ゝ
ふかの者ゝも既ゝ 旅廿理をもちゝ 都のかゝりゝ言もせだに八ば
其仕を 渡ぞとゝゝ信玄ゝ こまこゝり 山小屋ゝ向く 陸〳〵ちも
甚きびしく夜廻り 透間ゝく 呼ゝせゝり 日数を 経てやゝ
ゝゝり 出来め〳〵 附山小屋ゝり 夜討ゝ 出る 紙 ゝ 馬ゝ
寄ちれば 伏兵をみゝて 討ゝゝれゝり

○鹿島傳左ゝ ゝゝ者 伊豆の人なりゝ 北武名ゝるゞ 後ゝ
髪を 蘊ゝ 久閑と 称〳〵 伊東ゝ 引ゝりて 居ゝるゝを 信玄 事

て三千貫の地をにゝく招ゝゝ 久閑ゝゝ 年老ゝり 何の為ゝ
奉公すべきとて出ざり ゝ紙 尋問へこゝ ゝ ありとて ゝひて 呼
出〳〵 春ゝり 秋ゝて 夜〳〵 軍物ゝゝりせゝ 給てゝ 自 芥ゝり
てゝゝを 書ゝゝされゝり 信玄 四方ゝ 大國の敵 ありゝく 威名を
恐ゝれ〳〵 かゝ心を 用ひゝゝ ゝゝゝ

○永禄年中 備前上道郡 旅ゝ山の城ゝ 家所 治部 元常 ゝ 実
あり 此時 浮田直家 既ゝ 浦上を 滅〳〵

直家ハ和泉 能家の孫ゝ 能家ハ ゝ 浦上掃部助 村宗ゝ
土ゝ 備前 邑久郡 砥石の城ゝ 居ゝ 浦上の長 長 村宗
守護入道〳〵て 貫阿弥 ゝ ゝ 八鷹取山の城ゝ 威勢あ
ゝゝく 弟家を 殺害せゝ ゝ 享禄 四年の 年 浦上 細川

高國の加勢として攝州にて討死せし子無次郎といひしを
幼少にて居城三石八播州別の境故に近き和氣郡天神山に
移まして無次郎八浦上遠江守宗景といふの年長して備前皆
從ひ美作も半屬せり宗景多能家の子を與八家といふ父死
せる時出奔し甚愚にして佞中をもさまたひ食の体あり
しか佞臣に帰して西大寺福岡のかたに有るを父に懇ろ
なる阿部善善といふ者養ひ置愚なれば牛飼にせり
年經て召仕ふに下女をめあはせて子三人ありて直家忠家春
家共なり天文五年與家死に三子共中與家八歳なれば
宗景方にありて弟二人六ツと四ツになる故笠加の尼ち
ふ進家は母の姉に丘尼となり居申せしに頼みおりて直家

物静かなる生得なれば十一歳の比より俄に思慮ありて
滅小菽麥をもとさまくぶ天文十五年直家十五歳なれば
母の方にあけば母涙を流し三人中小兄なれば人せめて人
なみもあまりとひしすまるおろかなる人なれ
るば殿にて草履をもせるん物ないなる因果にて
かくなれこれを見るやうに打ちられるを與家見て
側近く居より実に思ふ八ひとつ母にて汝ぞ思
なぐるも程ありとやいよくなぐく体れて直家
こゝに一代大事にて誰まかせまかり洩まぐ
なるば其事叶はじと母にそは入れるるぞと問
家よく家を立て祖父泉別をば鴻村ぐ殺したり兄父仇を

討ちいで口惜くこそはいとも口して一度祖父は帰を遂げ
なんを為村を殺さるるやいわまりかこれと為村
ゆきるバ廿人位よりすけ至べきや只是の心を若め孫をめ
らし父祖の恥を雪ぐやとなるべきや十五歳れ殿宗景
ふを公仕うんやうをえうせまへかりそえるも此一大事口
出さ勢ようとなるといひうしうバ母怒き且怪く密に宗
景に告て直家初めく仕へうり直家かく智謀ある宗
景寵愛一乙子の城をいづくうう此時三郎右衛門とぞいひ
なる此比中山備中八沼の深ようち宗景に心ようむく年
あり宗景直家に密談を直家某八中山が女を妻とし婚
姻はいしんを除た老ちるかるる仰ぎ景年不忠をなぐよ

ことをうしうれんカの限をうえいや只一此報の
いそまに試ゆうしうんやとに宗景悦て行年ふもあれ是
ひとうさうの廿志ようせんを抜をいへバ祖父忠功の者ようて
ひしに為村私ふ殺しうう記君をかるしひる者ふれバ頸を
はねるも必誅をうべ記老れり祖父の仇ようへバあるこれを
家りて教やらんと生まれバ宗景守て為村汝が祖父を殺せ
し時予幼りしあるを島村権威を恐ようう記今我
もふくに男ようあるり謀ようくに為村中山二人を討べし
なりうしうとしうバ直家沼の城川に東ふ茶園畑とりふ
なりう爰ふ茶店を設磨がりふ出くく日暮まバ此所ようへて
卧し又沼の城ようひくく打とけうるうるみをなせり

或時直家中山に氏川隣りて南の方にまうでバ道遠し
茶園畑より垂水川を渡らん為ふ假橋をかけさせらまて
常ハとり垂く往来の時ハ舟をかけあんおをとらへバ佐中易き
わざの事なれ共直家ハ是を得たりと悦く
宗景に告げ沼より天神山の間ふ狼烟をあぐべしもうバ
佐中を討得たりとまうしよのろしあげるバ嶋村がりへ
使をなせ中山謀叛しなれ直家に下知してうせなく
沼ふかけ向て垂水に力を合せと下知あるハ時村年老
くまでに遠く慮ふ沼の堤に一騎ばかり沼の堤に
来るべきを待んず事易るべしと日を約しぬかくて先日
ふ及ぶ沼の奪場に垂水ふて日暮ふ及て城に入るる法

[illegible]と出り酒宴ふ及でり夜もいたく深ぬ備中も破れり
なり直家ハ[illegible]今ハ爰に[illegible]ハ佐中が士も座を
退出ぬ直家おもふん作[illegible]思ひもうけぬ不意に佐
中を只一刀ふ伐殺し躍出て大きなるをあぐれバ勇て相呼し
なる者ども城下に忍びく待うけ[illegible]ハ先にと城内ふ
池入しハ城中ふ[illegible]川向ふ伏[illegible]兵も関を
作[illegible]設けるる能ぐを攻入うるなるを山が士ども
切伏く城を攻うるもうかく狼烟をあぐ[illegible]ハ宗景即
嶋村がりふ使を池て告やうるハ時村ゆて[illegible]若
共く馬に鞍置せおゆ後兵七八人引[illegible]て沼の城に来
る城ハとく棄てるまバ直家ハ九[illegible]門を閉[illegible]

村々に謀をもちて本丸に入て文をかゝせて計て合せん
ハ取囲て討とり申さるゝ為村々軍兵一騎がけ三騎がけ
来る成道に待うけて討とりやゞて兵をおゝて鷹取山へ
かくれ入れバ防ぐ者なくて退ちりぐに成ぬ其家のゆゑ
に二人を数しこまつり勢強く沼の城に居て砥石に八弟の
春家を置給ふ浦上をちぼて備前を悉く均せり
沼の城に居て元常と姻戚なりしかれ元常毛利家に加へ
て直家に背く直家ら滅さんとすれとも龍の口八峰高く大川
麓に続て要害に加へ軍兵をこゝ直家園郷々と云係あ
津小路をかゝへ軍兵をこゝ直家園郷々八ちらくの罪に
る者小密にふぐてを引合せ時直家郷々八ちらくの罪に

かゝ来ま首をはんといそれしハ討るの左衛門ふこゝ
してくれ直家ちそして怒に来大方ゝ八体中に成
居申ちるゝ西郡の中にて乞食の老女のさまふ
ちの二人をも不思議ゝ思ちくおりるよ年比志を
きちるゝ七ふりあひめこそうれしきまで涙ちの有
さ体やさて見ちれるひさん幼き時立わるもなりけ母
うにちくに成ま乞食ゝ女八怪しきまに見へ俄に
やちるゝ彩小成まに八ちゝ成体にて有るやゝ立て々
龍の口山ゝ川向ひ金山寺山ゝ谷山船山の城主須木豊前が
ちゝ仕へ尋孫なる乞食の老女をおのゞ母と名づけて人質
に出ちるゝ須木八故ゝて元常と不和なりける時須木が弟国

より求得て黒の馬を盗み出し打乗て山下へ池下る城中より
八て馬と知やと呼まても耳もせず入て校石川原をかへか
けれとれバ須末も矢倉より上りこれを見てかく紀奴就討とあよ
と下知しまとてんやくにを打ちて龍の口の堀に棄ひて船
山の須末が士かくれ居あるを死罪とらひやとさ由を人の志
せんとて道を案てはあまと見て追て者ども川向からてい
城中ふかくさまとへといひれバ元常先山下にかくおさり須
木が士ども岡と推まとしとハ知ひかの乞食の老女を川原より
出し帰ひとハ母を殺とひ声ふ呼りて泣ひ乞女ハ
母まてい今ゆりとも母子二所小死んと宜とりとても棄
べこいとり城君と奉て此憤を散ドなんとひるかふ彼女

をハ縛りて殺しまとハ郷父悲と怒て母の仇目前山ひ
いふして此恨を報ひつさと歯をかくてなを紀れバ元常も心ゆ
るてひ岡あくまでひ紀若ちまとハ年月経ぶる中ふ元
常ど密謀をもゆ斗と愛せる岡今ハ時を得ひと直家ふ日
を宮て矢津の砦ハ軍兵ハ城龍の口ハ本九北ハ川向ふ出されふ
舟をかくて亟まてと告やりて相岡ひ左ハ小の方ふ間
所ひ知ひふ元常宇治宮ひ赤形ひ乞教も元常ハ氏ふの
欄干ふより居ひと岡つとよりて引くて下ふひ居
かくて見ひ役ひ手ちまとバ墜ひく所ふて一刀刺ひ身も歩
じひれバ元常ど首をとりかひ亟ひ小舟と乗ふ道ひ出て
直家のもゆふ帰る元常死して後竜の口ハ城落ひれバ

直家軍兵城入かゝく守らせらる

又一説ハ宇喜所元常浮田あよ後ざるうバ直家與太郎基家ヲ長船紀伊ちを延原土佐ちを添て攻させらるえ岩城を出山の麓段の原ハ陣して竹田河原ゆて軍せ〜ハ勇氣あるあかゝく基家も岡山ハ引帰せり城ハ険阻ハ據さり岩やすく攻ゝ〜と直家家長ゝと相謀るハ長船紀伊ち修理八武畧修りあまゝど色を好む病りあり孔一ゝるゝく城ハ入たゝ〜り討ゝやはまゝも才智かゝ紀すくや者なゝでハ叶ひゝ〜とて志きりハ岡清三郎を見やりらるまゝバ直家とかく拘いゝでやみりさて後強て直家ハ郎をとゝへくおゝるあき老臣ゝもハ清三郎ハ不義のふるまひらゝ音を切きと怒らるゝハ皆彼ハ加ハより奉公し今年十六歳ハ及て一度も過なゝと傳まゝども内人ゝ奥ゝ入さはハ岡豊前を招き清三郎ハ試ひゝらに落せよ清三郎ハ見れなく謀をいひせ〜りといひゝらバ岩ゝかくゝひゝり其あけの日おゝゝゝ牢ハあれバ清三郎ハ見えゝゝまバ殺さるゝ斗あり岩ゝハ清三郎を盗ゝ出し能の口ハ向枚石原ゝ忍ひ時修理城下ハ流ゝ漢揃せ〜ゝ尺八の声岩ゝり人ハ見せ〜ゝハ清三郎ハ有さ法を告まゝゝ剣術の師加藤十藏小姓の早川左門彼ハ六七人川向ハわゝりて其橋を見ハ容貌ハすゝれて美〜りあるゝ見る人あゝと尺八を納めて

菴の中ニ入らんとするをひきとゞめて問ふ守喜多家
此士岡清三郎とや者あるゞ無実ニ罪ふりて已ニ誅せらる
へきに家老ハまてゝく爰ニ隠し置きしを洞簫ハ直
家の猶子基家堪能にてわゝ羽ひていたりとやとて廿有
さゝ只人なりとて見られバ元常折具して熟口ニ切り人々
敵方の者なり用心なるべしと強くまとゞも直家さへ恐るゝ
足らずゝゝ間者ゝゝわまと又彼ニ付く謀をなさん
とて岡山ニ間者をやりて事のやうを守ニ清三郎ゞ詞ニ
ゞはざりくまバ元常疑ふ心もれく清三郎を寵愛し軍
場ニあるとゝり城上の小ゝ楼ニ醉ハせて事変くるゝ赤坂
郡和田の博奕和田伊織ことを聞ニ来て強まとゞ

多入さでかゝて炎熱の比小楼ニ上ニ酒もりして日頃ゝ
る尺八ハかゝゞ吹く清三郎ゞ膝を枕ゝて睡ゝり清
三郎よりひとくまバ首とゝんるゝ易しとひゝゞいゝ
ゝるまつる比ゝ浅ゝず寵愛ゝゝ人松市ゝく討ハ
人ハ非ずゝゝ仰と奉まく
刃をすゝく此城中ゝたゞゝ入ゝ時を得て私のなさけ
かへんも志あゝとひかゝ元常の脇指をゝりてゝ
首を打おゝ袴をぬぎて首を包ゝらゝ
ゝ清ゝ早川左門来りてゝ元常の戸ハ朱ゝ
ゝゝ大ニ驚きて清三郎ゝ殿をこゝゝと呼て
かゝて林ニ下ゝるゞ清三郎ハ小舟ゝゝ乗ゝとせく

左門追ぶさまり清三郎ぬりうてり切合ふ川が眉間を
切てきり伏さり城より追こさせ来れどもいや飛ぶ棹さし
て向の岸ふあがりぬ城兵ハ上の瀬地蔵岩のもとにはりたる
小舟ふ人ひきこえ乗ふておせどもさせども動らぐ其内ふ清三郎
岡山ふやれくこのうま帰アるり亦家ハ清三郎が若年ゆく
事よくこけん事叶ふかべし生てかへんまハもひもらぐ
あハれよりあるさ謀をあつる抱我ふ悔まるふ豊前清三郎をお
運て元常が首を切れ直家大ふ驚き且悦ひ且ていやしみて其
功を賞をるるなみくなるずこまより岡剛介といふ
竜口ふハ人ふ歯をかゝて怒まるせんるなり和田の伊織な
大将ふふく逆よせふ岡山ふ向てやせんとりへども和田も自らの城
をすてゝ無謀の軍をぶさふ悦ぶ皆ひきまるる斗なり直
家其勢を料て熊口ふおよせるまバ城主を失ひるる若ふ心ふ
ふなりて防戦の術なく多くハ落失れバ元常が教ふ切るる山
口興市もせんるれく士卒と共ふ落んも面目なりとて三の廓ふ
て腹切て死れバ即城落るる間亦家火をかけて焼ぶるひるり
和田ふも元ふ士卒力を失ひ落ちるまバ金川の城ハ松田が
一族とひるふなるんとて和田の城も一時ふ陥るり又上道郡中
島落城と熊の口落城と一日ふなり亦家熊口より引退
時中洲の城を取られるふ城主中島大炊毎勢少て防ぐ事
能ずず榎の大木ハ洞のるるふかるまるりるを防ぐ知
て遂ふ討まるり中洲ぶ子孫今ふあり又先時の援今ふみて

めぐり三丈ばかりあり

○浮田直家近國を攻さんと守毛利元就備中松山の城に三村紀伊守家親を下知して美作の三星が城を攻させ直家三村や戰ひ互に隣敵其隙ふようせ来るべし謀をもく三村を討ばやや思ひ遠藤七郎三郎とて新參の士を近ぢけ

遠藤はもゝ阿波の人なりしが此時備前國津高郡加茂と云所に居しかりしが汝は三村成羽に近く能足知て心美作に忍び行三村が陣に入て討んを本をたのむにたりとゝひられば是を頼やすく討べき者ぞ此ぞはまでもかゝる仰を蒙る事面目あり志のひ入てこそ見いはめとて作州に赴り家を修理も兄は今度

第死に一生も有べしと思ひ枕を死んとても打つまりなり永禄六年

三村は穂村の與禅寺とて山寺に陣してゝくらもを遠藤は夜ふけぬ後に竹林の中より忍び入樣の下かくまし置ふけくひそりに障子を外に立より内に忍ひしのぶに家親柱にもたれ居しに天の陽あるに鉄炮をさし當火蓋をとされば火なしの火消なり喜三郎あきまして居しに修理つと外に知あせりの人にまぎれかくれ出入を通りて高に羽折の裔に火を付け高声に番はゝ若ども いかに見りこの下にあるく兄ぞ火縄に火をとつせばやゝて三村が胸にとゝちぬきこゝに其鉛子は打と今に柱にあり此時三村がかゝに三村孫兵衛親成といふ老功の兵有りぐちつもさわぐ人ゝ走ぢりにへて

暴風を家親が前にたて外の体をうかがうゝ扨ハ夜討ふてハ
毎りきとて物見を出ふ三星より打て出るきゝさのかゝ親成
下知しく今夜陣中ふ引ゆとそべしとて松山ふ陣ゝく怪家狀が死
しゝる事を人皆聞とりゝゝ狀成なうせバ大ゝ落で敗北をべき
あと人皆いひあゝり遠藤ハ小しの竹林ふかくゝ居しゝ三村ハ死
ゝりと覚ゆふふりふちづうなる心得ぬ事と思ひなゝゝ忍び
て出ゝゝふ鉄炮を目子きゝゝり後ふうゝ事ゝゝりと議をん
も口をゝゝて又立ゆりちのびゝ切鉄炮をうりて兄弟共ふ陣ふ
帰ゝゝり後ふ一万石ゝくく宇垣の城ゝ居しゝ修理も中村ふ
崎の城をあづゝりきり家親が嫡子ハ備中猿掛の城ゝ入ゝ莊野
元祐とゝ二男ハ三村修理亮元親とゝひく備中松山の城ふあり

父の吊軍せんとて先謀をめゝゝゝ備前上道郡澤田の西妙禅
寺ゝ砦を攻ゝゝゝゝバ直家沼の城を出て攻ゝたゝり其時ハつゝ
して軍にべしとそすゝりゝる軍兵四百人夜ふちゝれ三棹山ゝうふ
しゝも妙禅寺ゝ砦を攻ゝりゝ其ゝ寺弥五郎根矢典八七郎ゝを入
置ゝり軍して直家妙禅寺の砦を攻ゝりゝれバ間ふ入ゝ者松
山ふゝせゆりてかくゝ告ゝゝバ三村元親ふ幸なりとて一族相集
ゝ其兵八二万ゝゝり備前辛川の駅ゝて兵をわくち一手ハ元祐大
将ゝて七千ゝを率て万成山の麓をめゝり春日明神の祠ゝ和
ゝり旭川をゝゝり旭山の下ゝり良ふ向ゝ三棹山ふかり妙禅寺の
後巻とゝ一ゝハ石川左衛門尉五手計ゝく首村ひゝけゝれふ
かゝり冨山ゝ北をゝ原尾鳴村ふ出ゝく直家が旗本へゝりゝせ一時

小勝負せんとかの三村元親八一萬人をひきゐて津島村より國府
市場をすぎて釣の口より城越四郷井村より山を越沼の城を攻やる
ゑてと條を定ておし入りの直家八かくともとゝぼ沼の城を出古
津の西宍戸に陣をとゝ宍戸方成山乃砦より敵三方ゟ出れ
て押よせと告来る前ゟ八故死地をちりて城ゟ籠りさり又
大軍攻来ると申ゑるまバいろめ紀ゟ出ざりゟ亦家ゟ出ひきま
ぢのぎ矣ひ此城ゟ攻らバ敵八幾万もあまゝ逃ちゝしてす
つゝき抱をゆいひもあゝ曽をとつゝく忌結びゝる緒のむゝ城
刀を抽くきりて乗馬ゟ打乗二十竹町乃田の中をとい文字ゝ妙
禅寺ゟ砦ゟかけ向先陣の者ゟ攻おくまゝく砦を攻ゝり得ゝ今旗
本おゝく無二無三ゟのれや者ゟ先陣乃

軍兵おめきゝ引くゝ思ひきゝゝ三村ゟ士ども引くゝく
討死ーゝれバ直家城ゟ火をかけさせ三棹山ゟ打上ゝ山上ゟ遥
ゟ敵をゝれゝくひくゝゝり元祐八春日ゟ宮の前をゝゝ玉井
ゝの方をゝ國富村近くすゝみゝゝ妙禅寺ゟ入ゝ討ゝれ
ゝる者ゝも落ゝゝて敵ゝや三棹山ゟゝ上ゝ引ゝとゝへバさわ
ぎ立ゝゝゝゝ戸川肥後守花房助兵衛岡越右衛門長船紀伊ち
等鉄炮をうゝ打すゝ中ゝ伝中の兵乱ゝ立ゝ國富ゝ徳
興寺ゟ間ゝて討ゝ者數をゝゝゝて元祐五十騎ゝゝゝ左右ゝて
猶やゝゝゝゝ敵ゝ向ひ延原土佐ちゝ兵を追立浮田左京ゝ朱
ゟ四半ゟ兒の字の馬ゝゝゝゝ法目ゝ立家の旗本ゝゝゝゝ
ゝゝ馳入て討死ーゝる首をバ能勢修理ゝゝゝゝ元親

八幡神村矢津の砦近くすむ妙禅寺の煙天をこがしてかくれのがるをたてすはや城は落るとひしめきあへり石川も相図の旗をたゞひめる上は元秋とひろまなりて軍せんとゝ平浮田元家九ヶ兒の字ばけさる旗山風ふ吹ちびけさせ一旦もひくまと呼はりくわ来り原尾鴻を北南へ数度進つ退つ相戦ふ備中の兵うゝ崩して石川も竹田村ふ引入んと川上へ人数をもゝむ直家兵をはしらろゝ高屋村まで進やれまバ石川八幡村まで取て返元家を見かけ三度火をちゝして敵ふ浮田の兵ともゝ討と雄町村を東へ出て敗北ば元親八思ふ仇をうちはたるのゝなゝばひぐひるく両陣の軍やゝ兄も討死ゝゝ五十口をゝく野の原を南ふひきむけ血眼ふなりて志光かけ只死狂やと罵りて面もふゝば戦ゝれば明石飛騨ち岡伝法守此鋒ふ破らまくゝれば元親軍八猛ゝゝとゝく後と接げ少ゝ敵を追ふゝ文ふ田村まで軍せゝ長船弓横あひかん来ばけふやゝゝえゝれば元秋敵ひかけ入んとせゝ武士ゝも嘲ふゝゝ付今日ならゝゝゝゝゝ兵を起ゝ仇を報ゆゝ時ゝゝと志ひく凍て引ばれおひかゝれば元てかゝゝ相支て釣の波りを越引ゝゝ家ゝかゝて孫直家ゝ仇を接ゝゝと志深ゝゝ慶ゝ光源院殿義輝を三好弑ゝゝ霊陽院殿義昭没落ゝゝひ織田信長をゝのゝゝゝゝ京ふハ信長村井長門ち護ゝゝ霊陽院殿志伸べゝゝ非ば備後の鞆ふ落ちき毛利家ゝゝゝゝゝゝゝゝ信長元親ゝゝゝ使を以て呼び将軍ゝくみ出て西國

の謀略をふさぐ織田家に忠を抜さバやがて信長師を出し中
國を討平げ備中備後を元秋に賜べしと誓紙を添ていひお
くまつハ元秋一族をあつめ将軍家に従ひ奉りもさバう
の大功もなるべうしバ殊に浮田家将軍に随ふたるハ無てこひ
設けうら仇を報ゆる事もかなハ信長の命に不従ひ
将軍を討奉りし織田家の力をゝゝみ浮田を討滅さんと
謀りしまバ皆尤と一度に三村孫兵衛秋成同孫太郎義勇父
子ハ父の仇を報ゆる他人の力なかるべきやんべき弓矢とる輩ハ
忠と孝との二つより外なし君君たらずとも臣ハ臣たるべ
ハ有べうしとこそあれ信長さバうてかゝひていく真実か
ゝと欺き虎狼のごく世に弥増する信長に従ひ奉る将軍を討ま

みゝせ毛利家を敵とするさんまつ悪逆不義の名遁るゝ
長将軍の威をかりく五畿内を討ちぐ後ハ将軍とあゞ
ゝ都を追出さゝ及ぶハ悪逆ハいとやかゝる人を主とする
さんこうるべくもなしと誅ゝるとゝ元親を始皆赤武遁をひ
らくべき時なるふ衆議ハ有く事ハ人ゝ怨られバ三村父子
ハせんかゝ新く成羽ハ帰ハ常山島郡備前児の城主三村上野介高徳
元秋の侵奪して高徳親成をすて至りしんハ必将軍へ告せゝ逆
ゞ妻ハ元親の妹なり親成をすて至りしんハ必将軍へ告せゝ逆
よせさんとく信長の援兵を乞て始ハ成羽を攻おんべ
しいひしまバ義ハ同じて信長のもやゝ使を遣し成羽ハ
らくべき役をなせハ秋成ハ如何ゝべきを案ゝ然ハ人ゝ
西洞院殿ハ偏ハ召ハ笑ゝハ兵をゝゝハ

といるバ松山を攻ントベーとキリかくて安藝備後の兵七千三
百餘騎ーおけらまつらバ天正三年五月廿四日松山へ攻よせる松山ニ
ハ元親も城を落去アて阿部山ニあり
城遂ニ陥元親も城を落去アて阿部山ニあり
をを同廿九日討とるく霊陽院殿へ注進ス
一説元親城を攻落さまつ付升弥助と申士元秋の行ス
ちひて安部山ふて逃つさえ元親と名乗城ニ帰アて討死せん
其間ふ爰を落のひて運をひらきとゝ元親ハ
ものゝれぬ所ニて使者を先て来ると自害ス
ふ再三諫め争ひーとゝ元親ハ位く今生
の暇乞ーかゝをやりて玉村ニ元親の母ふ送アとゞけ
さてそゝより城ニ帰り元親ハ匿ゝ所を法りて告来るを
と門をひらきとバ内ニ入此城を枕ニせん為ふ来れるを
名のりく敵ふ戦ひあゝ切伏て討死ーるを元親ハ使
者を待れふまづもなくとバ松運寺の道ニ出て民を
きあゝ城中ふいひおり使者を待うけく自殺せれ
二日ニ城をり
るまゝより児島の常山を攻んとて毛利家の大将小早川伊
豆守光重ふ三村父子相加アて戦ふして六月四日山
村児島郡ふ陣ーニ手ニわれく先陣浦兵部宗勝用吉より
守茂木ニかゝをおゝよせ六日の夜大手の木戸口へ攻よせより
高徳ハ怪光をゝの中をさ味方ふく射ニ累年毛利家ニ弓矢
ニ三村家の謀主れとバ此ごまんとゝ嫡子

源太郎高秀と共に鉄炮をうち出して敵の矛小七郎高重
ハ箭つぎぞやふ弓を射出して此三人に防がれて手負ふ者ハ
多くあり七日の暁に及て城中最後の遁家城外に寄せけ
まバ見られおくゝ攻よせゝ高徳の母我先さきにたちて
柱に刀ハ柄をむすび付走あるゝ時ぬれて死ぬ高秀
十五歳ハ残らんハ心がゝりなるゝといひく腹を切ぬ
二男八つに成ゝとひきよせく刺殺ぬ高徳の妹なるゝが
藝州鬼高山の城主ハ高徳の妻なるゝ所ゆれまを
いへども思ひもよらぬ事よといひ捨て母の貫きたる刀にて
乳のあたりを一通り枕に成ぬ高徳の妻ハ
此三歳ちゝぶ弓矢とりの女房なれて高徳に命を死す

半やゝ三村が一族今を限小一軍せんとく紋のうち衣を甲
の上にきて薙刀おつとりて出るを局の女ども打とゞめて
よとく立忍ひく命を全うせよ敵一人をも討とゞめて空
しく死なゝやあるとてふり切て出ばこの上ハ誰の
のゝ人くく立ゝ長柄の鎗をかり突て出る高徳の思顧此
十八十三人今日を限に切く出て浦が七百計ひとゝ立ちかゝ小
死狂ひに戦ひられバ討ゝ者多くされども小勢にて我ひ疲
くれぞゝ此の妻兵部をよひ腰ある刀抜ぬを出ぬ
八國平ゝ造まゝてゝ重代の物なり父ゝ心
にて身をとられさバ人ゝ武名冥加あゝ兵部屋にとゝまるゝ
とめひく城に帰て自害せて高徳も腹を切ばゝ子の高重父

諸〻く其者も後切りぬ葉を乱まく首をとり鞆の津
小笠原より常山の山上今ふを城跡なり
○永禄三年謙信八千の師を相州小田原へ出さる関東の諸将
皆々ちびさ從ひく十五万へ及べり旗本八高麗寺山の林小
ほし先陣太田三楽八小磯へ陣小条の兵戦八すして城へ
引入ぬ是ハ蓮也すぐ攻入ぬ鎌倉へ赴き鶴岡の八幡
宮へ詣らる上杉憲政の長尭等も皆群集成田長安警
固の者と爭論の事あり誅罰へ及ぶべきといへども宥
る成田讓信此怒を恐まし病〻出ぬこれを甲陽軍鑑へ謙信成
同年六月謙信上京せ〻る六月廿八日京都へ到り七月七日光
源院殿義輝へ謁し吉光の太刀黄金三十枚を献じ光源院殿
より管領の任又諱の字を賜ひ兄弟の義へ準ぜらるの命
を承り越後へ帰らるへ
謙信相州へ攻入る時京都より近衛関白前久公を進られ
管領の職を承る事此時より始まる又鶴岡へ系
譜し管領の職へ任ず近衛冥白前久公下向ありて光源
院殿ハ公方へ大和兵部少輔使ありといへり孰も
是なる事をそなへ又謙信上京の時三千計の人数を
越後を出られといへ光源院殿へ謁して後京堺住吉
所〻遊覧〻国へ帰るへ及て光源院殿小三好松永謀
叛の相あるれ共そなへ御書を賜ハりれ共上り誅
罰なれ共由密へやまれと三好松永も察し〻るや

深く恐まてり、永禄七年三好長慶河内の若江にて病死しぬるを松永かくれく翌年の春より公方を同じく召越後へ御書を賜はりて慶より松永此をや泄写くんいてぞ光源院殿を殺しぬるといへり

○謙信小田原の蓮池まで攻入りぬるハ鎌倉に赴たゞして軍評定あり時新田田国幡中治長女比十五歳なりしが進出かくれなくてなくなくバ一定味方敗北もべしとて謙信怒りて古のせいなるなるまふ拙ないひてといきてのバ治長居乗ず僅でくなり君臣の義を絶せ申りいなバ小田原に逃帰り北条家の先陣しく君を追討まゐらせ酒匂川のほとゝ少でハしやもく討奉らん物をとて謙信其時名をやらげ天晴剛の者よ神妙ものぞ武明日の後殿をせよと命ぜられる治長軍ぞてもらくすぐきてやゞて来りく小田原を引とり当り治長後景徳の世に及て二心ありなれバ家勝ぬを討るふ新田五十騎両城をたりく三年を経て城落なれバ治長深月毛と云馬に乗三尺五寸有る光重の刀を抽打て大軍の中へかけ入討死しぬ此るハきふあて色白き尾かみかくく茜の汁をそゝゆゝ染られバ年月を累て後赤江の糸をみぐるけるふ似たりとや井筒女に助出馬を浮く乗しぬるり又景勝治長を攻らく時治長が士に波多野忠左衛門と云強力の者ハ景勝のよせく道二すちの中に近き方を三渕と云く一騎打乃嶮岨ありもふ伝て来

勝のうち通らまん時むしゃと組て刺殺さんとゝひ三澤の岩穴
よかくれ居さるる系統院く打向ふ時皆口々に近き方より
よせ来るとゝ共景勝実に兵法に迂を以て直とゝいふ事
なり危きことを不見此患ありといひく三澤よりから道を
ハりてすゝまれしハ波多野ぶ者ゝ宛しく成るり

○永禄四年七月甲州と謙信とゝり入おゝ間者ども越後ふ
帰へりて信州の士二心ある者あゝ有りを五月上旬信玄川
中嶋に走て死罪ふ切ハ是ゝよりく裏を生ぜゝ多し又
和利ぶ嶽の家ふ士卒多くゝ賀討死しゝる由を告るを謙信
聞て三軍ゝ禍ハ孤軍より生ぜるとゝ是一ツ労るふ
ぶべきとゝ二ツ八月ふ入く師を川中島に出さるぶ士大将

を遠く呼あつめ各謀を問ふ存ぜる旨を書きて出る
拔擇ところて上中下ゝ三等とゝ其下策を用ゐべしとゝいとれ
ゝバ此ハめゝ用べきと怪しゝるゝバ謙信のいとく上策ハ既に敵
の家ふする変ゝとれを待べき謀おとゝりぶる由を申待設る
所へ攻入んとゝいとで諸べ死中策ハ数を評議せ一所ふ下策を
用ひて貝津の城をふゝ越西條山に陣し姑く敵の後巻を待ん
と決ゝ定り伝玄貝津の城に向ひく攻破ん又信玄川中
嶋に陣どりて五日程を塞ぐ者ゝバ吾軍勢の疲れ渡りを
渉らで直に貝津の城に向ひく攻破ん伝玄必救来るべし
其時又一戦しゝかるゝバ討死ぜゝ之下策を用ゐと雖

なりとて八月廿四日西條山に打入陣し中ちうなるに信玄後
巻して北對峙せしに廣瀬のわたりを越て見津の城
に入こうりかくて九月九日の晩謙信士大将をつゐ明日信
玄必打出て戦ふべきに今夜酉の刻ばかりをさかをしく
其不意に撃べし用意せよとて寅の刻ふるて川中島に
兵をあつ出し先陣ハ柿崎和泉後陣ハ甘粕備後守ハ殿
て十日の卯の刻ばかりに信玄一万騎の兵を率ひ筑摩川に打
く出善光寺の要路に付て虎に謙信軍をすゝめて一手
ぎりの合戦をもとむ謙信旗本まいくさなりて切ふに信
玄ハ旗本をたて崩れ甲斐の兵討ること数をしらずかゝる
西條山の甲州勢ハ兵一隊ばかり馳来る拙足て後伝兵をもと

め獲を全せしきてより甘粕後陣の兵士ともを
て信玄の旗本ぬけくずれまちうるが又乱まちらて廣瀬の
ふ引退く甘粕ハ因て西川を陣に来三日めく
引とまり

是謙信実記に據ふくもとなり川中鴻の戦ハ実説
ふく分明なるとて一説に天文廿三年八月十八日川中島に
戦ひつゝ謙信旗本半町計敗北ふ宇佐美駿河守
定行横あひふかゝに伝玄の兵大に乱まに帰川へ進入ら
に討ること老多し信玄八川の中に馬を立ふる天ふ後伝緑
は曇子にて包ふ肩衣にてをたし白さをぬぐひとも
て脇を包ふ三尺計の刀を抽ちち虎のあまにふくなる鹿

毛の馬に打ちまたがり信玄はいづくにか生やと呼る原大隅信玄に
事の変をあらべさやうろうく者よと罵り落て突れた
ぬきを外て謙信川へ馬を乗こみ信玄にかけよせ三刀ぞ
斬まくふ信玄持こたる軍配団扇も切をとまき手負て既に
危うく原大隅萩原弥右衛門槍をかりのべたこうけて
謙信を突きくふ馬のさんづにたうりる川の深さに惑
入りたまたま信玄の馬副け者ども信玄の馬を川岸ひき
ひたぶる物ともれ〳〵宇佐美駿河守謙信より賜
くうり感状も天文二十三年八月十八日川中島に於て横瀬
をもて信玄ぬきと突崩しこの世れたり弘治
二年三月廿五日も川中島にて軍ひつと謙信筑摩川を渡て
夜軍かくられしうば板垣駿河一条六郎渚角安房初原
源五郎輪形月織部小幸勘介を始めて討死さて老弱
甲斐の先陣上山うかうり来に前後に逼ぬ謙信小
を渡くうとれ此時に宇佐美駿河先陣して功
あり又永禄四年九月十日川中鴻の戦に武田の先陣敗北に
信玄の旗本をいてりぬて長尾政景の陣をくぶてか
ぬ渡越中一陣衆をこうて槍を入逆に甲斐に
軍敗小せ〳〵皆謙信家臣に賜り感状伝はまう甲陽軍
鑑川中島数度の軍を附合して一度とあれなるべし又一説
又永禄四年九月十日に我の手ハ謙信の家にひ伝る
事なりとうう弦ども謙信の感状を伝へて謙信実記を為

合すること叶はれば九月十日戰ふ事疑なくば又上杉義春入道入菴京都に閑居して有しう徒然の餘り甲陽軍鑑をよみ侍りて小事実謬まじる事のみれども高坂が死後此の外謬まじる事多く又ながさ人の名ば造りたるもうらくさもうらくさもうらくさ謙信は世のうハ予よりくたんうらふ此あやまれるかたぐ此書更に信ずるに足ばたて復ふたつ事なきわしていなく今を以て是を視るに甲陽軍鑑迂遠物なり又按るに今世に流行る書に川中島五戰記といへるあり此書は川中島の戰五度なりと忘せり然ども其中に載べきふたつ非ずしまして又正しき書に信ぜられず傳鶴岡に造て

の城田を拔るるに及ばず関東の諸將心こゝに離散して小荷駄を敵に奪はれ僅に謙信のみ遁れ越後に帰りて甲陽軍鑑に記しるも心得らるべし関東の諸將ひとり後にいたりて其年京に上る事の有べき是事[illegible]時勢は顯然なる事なり甲陽軍鑑の虛妄論をまつべ

○謙信は長サ高くして左は脚に氣腫ありてあるひは足をひくめくるとなり物の具まる事は勘く黒糸木綿の胴服を是に縫ふく造りて小袖車笠かぶり麾をもつく音竹を三尺計りにして杖のごとく提げ[illegible]士卒を下知せる

まるり深は韋轂が竹如意の遺風也とて

北魏の兵鍾離城を攻る時梁より韋轂を以て後援さを

らまてゝり北魏の將楊大眼勇將ゝて數万騎を率て戰ひ
しふ虜ハ素木ゝて造ゝり輿ゝ乘ふ白角の如意を執て軍兵
を下知し切かちゝる事史ゝんゝゝり

○永禄五年三月小条氏康父子武田信玄父子數万の兵を以て武
州松山の城をかこみゝゝと雖も謙信八千の兵をもて後巻せれ
しゝ十五日厩橋ゝ歸陣ゝまゝ城落ゝと雖ゝ出れ
ゝまゝゝ山の根ゝ陣へ打せ打破ゝ敵ゝ攻ゝ雖
北条武田父子四將乃大軍ゝ合せ軍ゝ事左ゝ無不
まことゝゝゝよく刀根川を打ゝゝ船橋を切流せ
山ゝ根の塚ゝ打ゝゝを勿攻ゝ小田助三郎と始ゝて皆ゝ
切ゝゝゝ使ゝ四將の陣ゝやりて松山の城ゝ向れを

を承ゝ出向ひゝ城ゝ攻ゝゝ軍ゝゝゝ事れゝて
日ゝの礼義ゝ背ていゝ唯今山ゝ根の塚を攻ゝ怪ゝやゝ
らんといひ送ゝ雖ゝ氏康かりて軍せんとゝ信玄のいゝく
今勝ゝゝも後信ゝハ四人ゝてゝゝゝ說らまん事口
ゝゝゝゝて比ゝゝゝゝ止ゝ住玄実ハゝゝゝ日
比謙信の勇氣信ゝゝも戦ゝゝゝ松山の塚ゝて怒ゝふ
ゝゝれバ其鋒ゝむゝひがゝく虎を恐ゝめゝゝゝゝゝ
又一說ゝ此時信玄ゝゝゝゝ太鼓を叩ゝ軍威嚴然
ゝゝ越後ゝ雪兵も物の具ゝゝや打向んゝゝゝ謙
信いゝゝ信玄かゝり来ゝ非ゝ引ゝん為なり馬の鞍
をおゝ甲冑をぬいで休息ゝゝゝゝゝゝ果て

信玄引退されたりといへり

○永禄六年十月十五日一向宗は堂と厚木坂にて軍ありし時
一揆より蜂谷半之丞渡辺源蔵先にすすみ味方小上
村庄右衛門黒田半兵衛と合戦渡辺黒田を突伏しさて
味方さそひかけて退くさんまこば蜂谷も渡辺も引退て細谷ハ
て小かくるを水野藤十郎蜂谷いふのぶれすぐと回をかくれば
蜂谷ぬきそばより少つと突て若十郎いそでうちまてふ敵を
ぐさいざ条くとて槍を地に付さつと手ふばたをはき
かけ出ばとて水野もふくめて近づき得ず蜂谷さもこそ
さしてとて又とづふ引退く蜂谷ぐ槍ハ三間柄の中をわふと
ハくく長吉が鍛ふる刃あるが強くく物を貫きとおり

東照宮御馬を乗出さるる蜂谷めをせと所詮をいかに
ふるまこバ逃ともとて逃る松平金助あてかけすぐに追つめ
バ蜂谷ふとをり殿なれば逃されば身ハひくさ
くりて取てかぶと金助を五六度もつきぐさりぐ
蜂谷槍をあげづきふくく重助を突伏に　東照宮蜂谷め
ふくく又御馬を乗つけさせこバ蜂谷引退ふくく
蜂谷其後ハ先ぐちて一向宗ふ黨をとられて除条て
ひとりくく敵かてこの一向宗の堂の者どく罪を所赦て
ぜりを後二連不の合戦ふ年多平八郎牧宗次郎槍を合
ふふ蜂谷ふおくまこ蜂谷ふとくく槍八合ふふ
ふふとう者ふ城ふ他人槍をふふ我八

城合はせよといひすてゝ馬に提げて敵の中へ乗込で二人お
ぎ伏さゝふ河井正徳といふ若鉄炮をかゝへ居る所を走り
かゝる正徳かくれもなきさまだまをうちゝゝふ痛手あり
ふ起ぐんとそこをバ引きゝゝとも蜂谷つひに死ぬる
こゝで又此正徳ある時せハしき場にて後殿しゝる射後と
も其ゝおひ討やまきと呼ることハ正徳生まれつき波なゝ
故手負ゝとゝひくかくいひゝるあり其時ふみとりて
弓箭神に誓ひゝゝ手負ゝハたゝ生得のちんぢでといい
入ゝゝより今川家ふかめて正徳といひゝとあり又蜂谷ぶ
痛手おひゝゝと其老母の冥ていふ首尾ゝ有つゝゝ問ま
さゝるこゝゝなるとゝ答まゝばうれしゝや士の戦場ゝゝかゝふ

ゝゝゝハ常の事ありゝ一手負ざ法のあゝりゝ世ハ
ゝも其途ふ面目なゝゝゝゝゝ戦國の時婦人
ハ弓矢ゝゝ家ふ生まゝゝハ志ゝゝ大ふゝゝゝ
想ゝつゝゝ事なゝり

永禄七年正月十六日三河一向宗の党と針崎ゝて終日ハ
合ゝり中根義と名のりて一番槍を合ハ撰ゝ相ゝハ波
ゝ半ゝゝなゝゝゝ鎗をすて刀をぬゝく飛込ゝり中根も刀
を抜互ふ手負ひ相ふ波ふ十郎三郎波ゝ
ハ目ゝけ追かけゝゝを渡邊ゝ父源五左ゝ出ゝすけ来ゝく
鶏殿を突伏ゝゝ
ゝハ塗ゝゝみゝゝひゝく突ハ

天文石川十郎左衛門渡辺左兵衛尉と競ひ
自八幡宮内孫甚市丸と走り来り添文左衛門股を射貫れバ
半之丞父と分て引退きてより物わすれせり内藤
渡辺が甥あり名ハ御石雅の時あるを敵討倒さと
なり

謙信信玄と和平を結んとせられし時長遠寺の僧を使ふせ
受僧ハ遊説の人なり謙信の傍ふ甲斐士に向井與左衛門
といふ者やあるとと問ふとこたへて又創の痕やあるとと問
ふ面ふ刀疵有とやこたへ謙信のいはく川中島の戦ふ名乗
かけて戦後より先を通て矢を抜て顧て一刀斬さ
ぞ哉ひつふなぐ人さ哉を

黄の胴肩衣と鎗ふ付ふと有ところ出し書簡を添て向ふ
くれたり此を世ふかくり感状とり其ま手ふ川中島の
をのせられとなり

常山紀談巻之二終